「天の次元」と「地の次元」

２０２０年２月22日（東京 新宿）
奥田 昌道

使徒的信仰に帰れ　十字架と聖霊　生物体としての自己保存本能　霊魂と肉体　十字架の死と復活の生命　神とサタンの実験台　聖書に全部書いてある　時代の制約　善をもて悪に勝て　キリストの足跡に従う　我と共にパラダイス！　霊魂不滅　最後の切り札　「ゼロ＝無限大」　旧い我と新しい我　肉なる人と霊なる人　天の次元と地の次元　人間の霊は父のもとへ帰る　「ボヤッと生きているんじゃねぇよ！」　「ギョギョ～ッ！」と驚く　荒野の試み　チェンジしなさい　キリストのプレゼント　キリストの十字架の御業の凄さ　祈り

●使徒的信仰に帰れ

小池先生は、

「使徒的信仰に帰れ」

ということをよく言っておられました。「使徒的信仰に帰る」ということはどういうことでしょうか。それは別の言葉でいえば、どういう在り方を指しているのか。使徒、アポステル、キリストの直弟子たち、ペテロ・ヨハネ・ヤコブといろいろキリストの直弟子たちがいました。その人たちの霊的レベルへ帰ろう。時代があとになればなるほどズレが大きくなってきているから、もう一度あのキリストの時代、特に直弟子たちの時代、非常に聖霊のはたらきが鮮やかであった時代に帰ろうよと。

それを「原始福音」という言い方を先生は一時なさった。「ウル・エバンゲリウム」「根源的な福音」、福音の最も深いところ、そこへ帰ろうと仰った。ところが、別のグループが「原始福音」と言い出したから、先生はそれをひっこめられた。残念ですけれども。

福音のもうひとつ奥の世界へ立ち返ろう。それは結局、キリスト御自身が目指されたところへ立ち返ろうということになります。キリストが目指されたところに我々も行こうではないかと。

「まず神の国と神の義を」

という、つまり神・キリストが何をいちばん願っておられるか。キリストが願っておられることが我々にとっての最大の目標なんです。「自分たちがこうありたい」とか、「自分たちが」ということではありません。

「まず神の国と神の義を求めよ」（マタイ６・33）

と、キリストは仰った。その「神の国と神の義」は、キリストは他人事のように仰っているけれども、実はキリストご自身の中に宿っているわけです。「それを求めよ」と言ってお

られる。福音の第一声が、

「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信仰ぜよ」

と、キリストは言われた。つまり、

「もう終末が近い。神の審判が近い。ボヤボヤしている場合ではない。チコちゃんに叱られるぞ、ボヤッと生きているんじゃないよ」

というわけです（笑）。それがキリストなんですよ。世の終わりが近い。世の終わりは審判なんです。審判で誰か立てるか。洗礼のヨハネはそれを厳しくやったから、みんなは、

「どうしたらいいか、どうしたらいいか？」

「お前ら、無茶苦茶に取り立てたやつは倍にして返してやれ」

とか、ヨハネはさんざん言いました。そこへあとからキリストが出て来られた。ところが、キリストの福音を見てたら、全然ちがうんですね。全然、審きなさらない。それでヨハネは躓きました。獄中から、

「別に他の人を待つべきでしょうか？」

と、弟子に尋ねさせた。それに対してヨハネに答えてやりなさいと。

「貧しい者は福音を聞かされ、盲人は目が開かれ、聾者は耳が聞こえるようになり、死人までも甦っている。私に躓かない者は幸いだ」（マタイ11・5～6）

と。ヨハネは非常に激しい審判を予想していたのに、キリストはそうでなかったので、ヨハネは躓いた。

●十字架と聖霊

やはり何が大事かというと、神・キリストがいったい我々に何を求めておられるのか。それを我々はどう受けとっているか。それが私にとっての原点なんです。そこへ立ち返っていく。それをやはり小池先生も一番目指されたのでないかと思う。別な言葉でいうと、先生にとっては、

「十字架・聖霊」

なんです。決定的に大事なのは「十字架」、それをくるっと丸でつつんで「聖霊」（十を○の中に包む図を書く）、十字架と聖霊なんですよ。

「徹底的に十字架を受けとりなさい。十字架が本当に受けとられているところにだけ聖霊は来てくださる。十字架がデタラメなところで、ワッショイワッショイと祈って、来る霊はどんな霊が来ているかわからんよ」

と。ワッショイワッショイ祈れば、霊はくる。しかし、それは本当に神・キリストから来ている霊なのか、変な霊の霊力がきているかわからない。だから、先生にとっては十字架がまず徹底的に大事なんです。パウロも言いました、

「われ主と共に十字架につけられたり」

と。十字架につけられて生きている人はいない。旧(ふる)い自分というのはエゴなんです。

「神さまは、自分（人）を幸せにしてくれる神さまなら、自分は信ずる。自分を幸せにしない神さまなんて要らん」

と人は言う。つまり、神さまは人間の僕(しもべ)なんですよ。ところが、キリストが願っておられるのは――自分はゼロでしょ――

「父よ、あなたの御意(みこころ)を」

と。キリストは神さまの御意がすべてだった。その御意は、

「いろいろな人を助けてやれ、救ってやれ。病気を治してやれ」

「はい、わかりました」

と、ことごとく父の聖旨(みむね)に従って、キリストは自分を委ねていかれたら、ああいう不思議な業がいっぱい起こりました。けれども最後は、

「お前は十字架にかかれ」

と。あんな無茶苦茶な命令はありませんよ。

神さまの御意を第一にして、そしてそれに自分を委ねきって、御意のままに生きた方。これを「義人」というんです。義人というのは、神の義が貫かれている人です。神さまの御意がそのまま百％に貫かれている、そういう人間を義人という。

「義人なし、ひとりだになし」

なんです。というのは、人間というのはみんなエゴイストですから、さっきから言ってますように、

「自分を幸せにしてくれる、自分を天国へ連れていってくれる、そういう神さまならＯＫ。そうでない神さまは要らん」

という、自己中心なんです。結局、「信仰がある」とか、「信仰がない」とか、言いましても、全部自分のためです。ところが、キリストの場合は、

「父よ、御意を、どうぞあなたの御意を」

と求めた。その御意が、始めはよかったですよ、

「苦しんでいる人を助けてやれ、病気の人を救ってやれ」

と。ところが最後は、

「お前は十字架にかかって死んでくれ」

でしょ。こんな目茶苦茶なことがありますか。百％に神の御意に委ねきった人に、「お前、死んでくれ」という。

「何でなんですか？　私は何一つあなたに背いたことはありません。あなたの御意が私のすべてでした。それなのに、『お前、十字架にかかれ！』とは何なんですか？」

これが私は、ゲッセマネのキリストの祈りだったと思う。本当に苦しんで祈られたでしょ。今まで父なる神とキリストは一つなんですよ。一つなるものが引き裂かれて、神さまは「知

らん」と言われた。

「お前なんか、しらん。お前は地獄へ落ちろ」

「そんなことがあるんですか!?」

と。それがあとで十字架上で、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄てたまいし」（マタイ27・46）

と叫ばれたでしょ。それほどまでに人間の罪は深いということです。それを我々は本当に受けとっているかというんです、「十字架、十字架」と言うけれども。それで、

「十字架を本当に受けとらないと、聖霊は来ないよ」

と、小池先生は言われた。だから、いかに小池福音の奥は深いか。それをよくわかってほしいんですよ。単なる人間の「悔い改め」とか何とか、そんなレベルではない。

どんなにしようもない人間の、いわゆる「業（ごう）」の深さ。それをも全部、キリストは引きとってくれた。そして、

「彼らをゆるしてやってください」

と祈られた。さんざんイエスにお世話になった連中がみんな、

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ！　バラバを許してやれ」

と叫んだ。バラバというのは強盗殺人犯ですよ。

「バラバを許せ。イエスを十字架につけろ！」

と全部、付和雷同してそこへワッショイワッショイと行ったでしょ。

「あんなのは、昔のああいう連中はアホだから」

なんて、我々は言えないんですよ。みんな間違えばそういうところへ、付和雷同していってしまうんです、群衆心理というのは。そういう、人間は危機的な状況にある。

それをキリストは、

「父よ、彼らをゆるしてやってください。彼らは訳（わけ）のわからない駄々っ子なんですから、どうぞゆるしてやってください」（ルカ23・34）

と、あの十字架の上で祈られた。イエスからさんざんお世話になったご連中が逆のことをやって、

「バラバをゆるせ、バラバをゆるせ」

と。私だったら、とても我慢ができないですね、

「この恩知らずめ、お前らは地獄へおちろ、バカッタレが！」

と、怒鳴りつけて、そして私は十字架にかかって死ぬよ（笑）。それくらいの気持ちになりますよ。ところがキリストは、

「彼らをゆるしてやってください」

と。こんな人がありますかと、私は思う。

●生物体としての自己保存本能

キリストは「山上の垂訓」というところでいろいろ言っておられます。普通の人間にはできっこないことを言っておられるんです、

「敵を愛せよ」

なんてね。

「天の父は、善き者にも悪しき者にも雨を降らせ、陽を昇らせ給う。……汝ら天の父の全きが如く全かれ」（マタイ5・45～48）

とか、そんなことは普通のエゴイストの人間にできるはずのないことを、キリストはバンバン言っておられる。しかも、

「汝らは地の塩なり、世の光なり」（マタイ5・13～14）

なんて言う。そういう言葉を平気な顔して読めるものではない。しかし、それをキリストは突きつけておられる。それをパウロは――パウロは一生懸命やっていたけれども、それはダメだということに気づいて――そこで、

「われ主と共に十字架につけられたり」

と。生まれながらの自分というものは、どんなに修養しようと、どんなに御言を読もうと、どんなに祈ろうと、変わりっこない。そしたら結局、自分も十字架で死ぬほかない。旧い自分というのは葬られるほかないと。でも、自殺したらいけません。そしたら、どうしたらいいのか。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるにあらず」（ガラテヤ2・20）

と、パウロは言ったでしょ。あれを本気で受けとらないといけない。生まの自分というものは、どんなに引っくり返っても、そのままでは神の御意にかなうなんて無理なんですよ、生まの人間というのはエゴイストですから。

これは、私からいえば、生物体としては当然なんです。自己保存本能というのは神さまが下さったんですもの。動物だって昆虫だってみな、こっちがやっつけようとしたら、逃げ回るではないですか（笑）。そうでしょ。全部、自分を大事にしたいというのは、神さまからいただいた本能なんです。しかし、そういう本能にまかせて生きているのでは、神さまの高い霊の次元と全然ちがう。結局、土から出て生まれた人間は土に還っていく。それが我々の生まの人間なんです。生まの人間は、そんな簡単に自殺したら困るんですよ。むしろ神さまは望んいらっしゃらない。

「生まの人間は生まの人間らしく貫け」

と言っておられる。けれども、それを貫いたら――それこそ競争社会でしょ、他人は蹴落として自分を守っていく――それもまたダメですよね。だから、どっちにころんだって、どうにもならんという人間の在り方。これにまず気づくことなんです。そうしたら、絶望

しかないでしょう、普通は。しかし、

「絶望はするんじゃないよ。我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我によらでは、父のみもとに到る者なし」

と、キリストは言ってくださった。

「天国の次元へ行くというのは、私という道を通って行かないと、誰ひとり行けない。自分の立派さとか、自分の信仰とか、自分の何かで行けるような、そんな生まっちょろいものではないよ」

と。「人（馬鹿）は死ななければ治らない」とよく言いますわ。生まれながらの人間なんていうのはエゴイストで、これはそのままいくら修養を積んだって、どうにもならん。たまに行者（ぎょうじゃ）で、修養を積んで悟りを開いた人がいても、私は全然尊敬しない。

「お前ひとりではないか。他のやつはどうなっているのか。みんなが救われてこそ本当ではないか」

と。そうでしょ。

●霊魂と肉体

皆さん、空気を瞑想してください。これは特別にえらい人だけが吸うものですか。ちがうでしょ。我々は空気に包まれて、空気によって生かされている。誰もみんな、空気がなかったら生きていられない。その空気という最も大事なものが、我々は無意識的に寝ても覚めても、空気は私たちを清めてくれている。太陽、光、これもまた誰にでも与えられています。穴蔵に潜（もぐ）っていたらダメです。「要らんわ」といって、拒絶していたらダメです。けれども、「ああ、太陽が慕わしい」といって、地上へ出てきたら、みんなに燦（さん）々とそそがれる。特に日本なんかは、太陽が豊かな国ですから、そうやって恵みが来ているでしょ。そういうことに気づくことが大事なんです。

しかし、そうやって太陽の恵み、空気の恵み、水の恵み、すべては我々の肉体を養ってくれます。けれども、肉体はどうせ120歳なんですね、最高は。決まっているそうです、120というのが。しかし神さまは、

「お前は、120歳で終わらせたくない。お前の肉体の生命は120かもしらん。けれども、私はお前の中に、肉体の生命の奥に、もうひとつ大事な霊の次元、神の次元の生命を与えた。それを受けとる場所が霊なんだよ」

と。肉体は土に還っても、霊は土にかえらない。そうなんですよ。霊というのは生きているんですね。心臓は頭脳と繋がっていますから、脳は人間の身体全部を支配しているでしょ。けれども、どうも、霊というものだけは脳の支配とまた別のところにあるみたいに私は思います。

だから、人間は死んだって、霊魂は生きているでしょ。霊魂はさまよっている。お墓な

んかに小さい子が行くと、霊がくっつくんですよ、「助けてくれ」といって。そしたら、その子どもは病気になる。それは、霊は子どもにすがって、「何とかしてくれ」とやっているけれども、子どもはそんな力がないから、結局、病気になる。そういうことなんです。

だから、人間存在というのは、頭脳を中心にした、ひとつのコントロールする生物体としての機能がありますが、それとは別個に霊というやつがあるんですね。私はわからないのは、いつ霊が入るのか。赤ちゃんが生まれる時に、精子と卵がくっついて胚となって成長していきますね。霊はいつどこで入ってくるのか、わからないですよ。それでまた、肉体が滅びても、霊だけは残っている。だから、霊というのは、肉体としての人間、生物体としての人間の、どうも外から来るみたいで、そして、生物体としての人間が土にかえっても、霊だけは独立している。それは結局、神さまの次元と繋がりをもつんです。

ところが、その霊が、普通の人間はみな

「神さまは要らん」

と言って、さ迷っているんです。そういう人間の姿、エゴ、競争、お互いに食いつぶしあう。つまり、戦争もみんなそういうところから来るでしょ。それに対して、

「神さまは霊を妬むほどに愛し給う」

という。それはどこに書いてありますか。

「神は人の中に住ませ給いし霊を妬むほどに愛し給う」

と。旧約聖書からきている言葉ですけれども、新約聖書の中にある。ヤコブ書4章5節です。ヤコブ書というのは素晴らしい。あまり小池先生はとりあげておられないけれど。ルターはヤコブ書をボロクソに言ったけれども、あれは間違いです。ヤコブ書は素晴らしいですよ。やはりキリストの直弟子でしょ。「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ」といって、いつも三人の名前があがっていますから。

「5 **聖書に『神は我らの衷（うち）に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚（むな）しきことと汝ら思うか。**」（ヤコブ４・５）

と書いてある。

●十字架の死と復活の生命

小池先生の福音のいちばん中核は、十字架と聖霊なんです。「十」を書いて、それを「〇」で包んでおられる。「十字架・聖霊」なんです。この聖霊は、我々のところへは来ないんですよ、普通は。我々罪びとのところへは聖なる霊は来ない。聖なる霊は清められたところへしか来てくれない。ところが、我々は自分で清めることも何もできない。自分で自分のエゴという罪をどうにも始末できない。それでキリストが十字架で始末してくれたんでしょ。それがさっき言いました、パウロの、

「われ主と共に十字架に付けられて死んだ」

ということ。十字架につけられて生きている人間はおりませんからね。生まの自分は生きているようにみえるけれども、

「本当の根源的な霊なる人としての人間は、主と共に十字架につけられて死んだ」

と、そう言ってくれている。だから、自殺は必要ないんです。

「十字架で旧い私はもう十字架につけられていなくなっている」

では、死にっぱなしか。とんでもない。キリストはご復活されました。その復活の生命を我々に下さったんです。それが新しく生きる私たちなんです。

「ひと新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず」（ヨハネ3・3）

と、ニコデモにキリストは言われたでしょ。「ひと新たに生まれる」というのは、霊なる人として生まれること。我々は肉の人として、肉体の人として生まれました。これは動物として生まれている。けれども、動物としての生物体としての人間だけでは、神の国とは縁を結べない。神さまの国は霊の次元ですから。我々は肉の次元、土の次元でしょ。だから、土から生まれて土に還（かえ）る、そういう人間でありながら、それに神さまは霊を与えてくださった。その霊を妬むほどに愛したもう。その霊に神の霊がくっついてくださるはずなんです。

ところが、我々が汚れていると、聖なる霊はくっつけない。聖なるものは汚れたところへ宿れない。では、どうしたらいいのか。十字架で我々のエゴイスティックな旧い我々を全部、十字架で片づけてくださった。それが、

「われ主と共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるにあらず」

とパウロは言ってくれた。だから、生まの人間、肉体としての人間、それは土から生まれて土にかえる。それはどうしようもない。生まの人間がいきなり霊化するわけにはいかん。生まの人間は生まの人間で結構なんです。けれども、生まの人間でありながら、その一番深い霊のところへ神の霊がくっついてくださる。でも、こんなエゴイスティックな汚れた人間のところへ神の聖なる霊がくっつけないのではないか。

「大丈夫、十字架で片づけた。お前はきよい。お前は十字架で潔い。私が潔めた。だから、私は、潔められたお前の中に宿るぞ」

と。聖霊が来てくださる。だから、十字架で私たちのエゴイスティックな旧い我々はもう葬り去られた。それがパウロが言っている、

「われ主と共に十字架せられたり」

ということ。キリストが十字架で死なれたでしょ。そのとき旧い我々は、私も一緒に死んでいます、神さまの眼から見たら。では、死にっぱなしか。とんでもない。新しい生命を、ご復活の生命をキリストは下さった。その新しい生命へ聖霊が来てくださる。清らかですから、新しくされていますから、清らかな新しく生まれた私のところへ聖霊さまは来てくださる。これが中に宿り、そばにくっつき、ハグして、引っ張って行ってくださる。そして、肉体がやがて土にかえる時に、霊だけはスッと天国へ引き上げられていく。これが我々の

姿なんですよね。福音というのはこれなんです。

土から出て土にかえる。そういうはかない、せいぜい120歳のいのち。しかしながら、その120歳のいのちでしかない、生物体としての人間の奥底に霊をくださった。その霊を神は妬むほどに愛したもう。というのは、何をねたんでいるか。サタンにくっつかれて持っていかれないように、神さまは見張っておられる。それがここに、

「神は我らの衷（うち）に住ませ給いし霊を、妬（ねた）むほどに慕いたもう」

という。「妬む」なんてよくないでしょ、「あいつは妬みぶかい」とか。つまり、

「サタンとか神ならぬものにつかまれて引っ張られたのでは、私はがまんできないよ」

といって、何とかつかまえて引き戻そうとなさる。そういう、神さまの霊と悪魔からくる霊とのせめぎ合いなんです、この地上は。

●神とサタンの実験台

結局、ヨブはそれを体験させられた。ヨブは気の毒ですよ。神さまとサタンが天上で言い争いをやっている。その実験台にヨブはさせられて、さんざんいじめられて苦しめられた。神さまは、

「ヨブは絶対に勝つにちがいない」

とやっておられるわけで、ヨブは実験台になって非常に苦しんだ。友だちも全部ヨブに、

「お前はどこか悪いところがあるから、こんな目に合うんだ。お前にこんな不幸なことがいっぱいあるのは、どこかお前はまちがっているからだ。どこかお前は悪い」

と言う。ヨブは

「おれは悪くない」

と。あれは本当に天上で神さまとサタンが戦っている。しかも神さまはヨブをものすごく自慢なさっている。それに対してサタンは、

「それはね、いいことばっかりしてもらったら、誰だって神さまを好きになりますよ。いっぺんヨブを徹底的に苦しめてごらん。それでもなお、あなたを愛し、あなたを信ずるなら、わしは納得するよ」

「そうか、では、やってみい」

といって、さんざん酷い目に合わすわけですよ。ヨブはわからないからね、そんなことは。「なぜだ、なぜだ」と。始めは財産でしたよ、そのうちに家族も奪われる。とうとう奥さんまでが、

「あんたはこんな神さまなんか信じないで、舌咬（か）かんでもう死になさい！」

ぐらいの言い方をして、奥さんまでも離れていったでしょ。あれは本当にそうやって人間の知らないところで神さまとサタンとが戦っている。それが地上に投影されているだけの

ことなんです。

だから、今は地上にいろんな災害が起こっていますよね。これも長い大きな眼でみたら、天上の神さまという霊と、それから敵対するサタンという霊と、それの戦いが地上に投影されているのかもしれません。それは、私は「かもしれません」としか言えません。そういう大きな神さまの歴史の中の出来事ではないかと思う。地球温暖化にしても何にしても。

そして、キリストは、もう終末は近いと言って、

「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マタイ３・２）

というのは、

「今にも審きがある、今にも審判がある。今にも世の終わりがくるぞ」

という緊張感の中で福音は語られている。ところが、そのあと全然来ないではないかと。のんべんだらりと何もない。

「そんなもの、嘘を言われているのではないか？」

と、そんなふうに人は思いだした。

「それはウソではない」

というのがペテロの手紙ですよ。

●聖書に全部書いてある

「ペテロの第二の手紙」（ペテロ後書）の第３章。聖書には全部書いてますからね、本当に聖書というのはすごいですよ。全部書いてますよ、いろんなことが。だから、私はもう皆さんに、いろんな本を読まないでいいから、聖書を――黙示録はちょっと大変ですから、これは省いて――黙示録を除く福音書、使徒行伝、それからパウロ、ヨハネ、ペテロの手紙、そういうのは全部繰り返し読んで――「読書百辺、意自ずから通ず」という寺子屋教育がありますが――そういうふうにして本当に習熟してほしい。聖書は全部書いてますから。

ペテロ後書の３章３節から、

「3 汝等まず知れ、末の世には

今は「末の世」です。あの時も末の世だった。二千年経ってもやはり末の世なんです。

嘲る者嘲笑(あざけり)をもて来(きた)り、おのが慾に随(したが)いて歩み、4 かつ言わん『主の来りたもう約束は何処(いずこ)にありや、先祖たちの眠りしのち、万(よろず)のもの開闢(かいびゃく)の初(はじめ)

「開闢の初」というのは天地創造の初めのとき、

と等しくして変わらざるなり』と。

ちっとも変わらないではないかと。つまり、

「『今にも終わりが来る、今にも終わりが来る』と言われてきたけれども、全然来ないではないか。あれはウソではないか。何も変わってないではないか」

と。そういうふうにして神の言葉を無視し、それを信ずる人をバカ扱いする。嘲るやつが

やって来るよと。現代もそうかもしれませんよ。

5彼らは殊更に次の事を知らざるなり、即ち古神の言によりて天あり、地は水より出で水によりて成立ちしが、6その時の世は之により水に淹われて滅びたり。

これはノアの洪水のことを言っていると思う。

7されど同じ御言によりて今の天と地とは蓄えられ、

やがて終わりがくる、地球も全部焼かれてしまうと言われていますから。

火にて焼かれん為に、敬虔ならぬ人々の審判と滅亡との日まで保たるるなり。

最後の審判が来るよということを言っているわけです。

8愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。9主その約束を果たすに遅きは、或人の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて汝らを永く忍び給うなり。

今だってそうでしょ。

「二千年経っても何も変わらないではないか」

と。変わらないことはないと思う。温暖化でしょ。やがて地球は危ないですよね、もういろんなことで。そう思いますけれども。

10されど主の日は盗人のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とその中にある工とは焼け尽きん。

いや、こんなことが起こるのかどうか、私は知りませんよ。地球がなくなるとか、そんなことは知りませんけれども、こんなことをペテロは示されている。

11かく此等のものはみな崩るべければ、

目に見える地上のものは全部やがて滅び去っていく。永遠ではない。だから、

汝等いかに潔き行状と敬虔とをもて、12神の日の来るを待ち之を速かにせんことを勉むべきにあらずや、

「主よ、きたりたまえ。早く来てください」と、それを待ち望み、祈っていくべきではないかと。

その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。13されど我らは神の約束によりて、義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。

こんなスケールの大きなことを言っているんですよ、昔の時代に。これは驚きではないですか。私は本当に驚きます。こういうことを書かされている。これは自分で書いてませんよ。本当に示されて――それは「お筆先き」みたいになったかどうかは知りませんけれども――これはもう絶対に聖霊によって示されなければ、こんな言葉は出てこないと思います。

14この故に愛する者よ、汝等これを待てば、神の前に汚点なく瑕なく安然

に在らんことを勉めよ。15且われらの主の寛容を救なりと思え、

主は情け深い、寛容である。我らの罪のかさにしたがって審きたまわない。そういうお方だ。それを救いだと思いなさいと。

これは我らの愛する兄弟パウロも、その与えられたる智慧にしたがい曾て汝らに書き贈りし如し。

ペテロは、パウロが時々わからんことを、難しいことを言っていると、ちゃんとここに書いてますよ。ペテロは漁師です。ところが、パウロは学者でしょ。

16彼はその凡ての書にも此等のことに就きて語る、その中には悟りがたき所あり、

難しいことを言っているところがあると。

無学のもの心の定まらぬ者は、他の聖書のごとく之をも強い釈きて自ら滅亡を招くなり。

「無理に解釈して自分を滅びに定めない方がいいよ。わからんのはわからんで放っておきなさい、パウロはちょっと難しいことを言っているから」

と。正直でしょ、こういうのはね。

17されば愛する者よ、なんじら預じめ之を知れば、慎みて無法の者の迷にさそわれて

無法の者に誘われて、フラフラとあらぬところに行くのではないよと。

己が堅き心を失わず、18ますます我らの主なる救主イエス・キリストの恩寵と主を知る知識とに進め。願わくは今および永遠の日までも栄光かれ（キリスト）に在らんことを。（ペテロ後3・3～18）

これは素晴らしいでしょ。なにか私はこういうのを読んでいると、今にもそばにペテロがいて、語りかけてくれているように思うんですよ。

「ああ、そうや、ペテロさん、おおきに」

と。本当にそういう感じですね。

●時代の制約

「ペテロの第一の手紙」（ペテロ前書）も素晴らしいですよ。たとえば、ペテロ前書の2章18節あたりから見ます。当時は奴隷制度というのがありましたから、使徒たちは奴隷制度そのものの撤廃を言わなかった。リンカーンがやりました、やっとあの時になって。ところが、聖書の時代は身分社会で奴隷制度をそのまま受け入れている。しかも、

「奴隷は主人に尽くしなさい。主人は奴隷を丁寧に扱いなさい」

と。そういう言い方をしている。そういう面ではやはり時代遅れです。しょうがないんです、時代の制約がありますから。それをリンカーンは奴隷撤廃で南北戦争をやったでしょ。や

はり、そうやって、時代によって進んで行くはずだと思います。ここでは、奴隷制度というものを一応肯定したうえで、しかし、

「**奴隷は奴隷としての勤めをしっかりやる。主人は主人で奴隷を酷(ひど)い扱いしてはいかん。そういう、秩序は秩序として保ちながら、お互いキリストの心でそれを活かすようしろ**」

という言い方をしている。だから、進歩的な人からみたら、

「聖書なんて旧い。奴隷制度を肯定している」

と言うけれども、やはり時代の制約というものがありますから、永久不変のものなんてありません。時代とともに変わっていくはずです。

男女の関係だってそうです。聖書は、どこまでも男が優位で、女性は補助者みたいです。今は男女同権でしょ。すべてのことは時代によって変わっていく。その中で変わっていいものと、変わっていけないもの、そういうものをちゃんと我々は見分けていく。そういう知恵をもたないといけないと思う。

たとえば、王権神授説ということがある時はありました。つまり、王様の権威は全部、神から来ている。そういった国王の権力とか、統治者の権力を正当化する。そしたら、抵抗権というものを学者が言い出すわけです。無茶苦茶な王様でも従わないといけないのか。暴君でも――極端なのはヒットラーでしょ――そんなものにも従わなければいけないのか。「いや、抵抗権がある」ということを学者が言うようになった。

だから、やはり聖書というものは、いかにも不変的で永久だとしても、それは結局、時代時代によって不完全なところがある。それを見ぬいて、

「もっと深いところで神さまの御意(みこころ)はどうだ」

という捉(とら)え方をしないと、暴君に屈従して、

「ただただ仕えるのが僕(しもべ)の道として正しい」

なんていうことをやったら、おかしいですね。そのへんは本当に難しいと思うんです、歴史というものは。まぁここでは、こういう時代のことですから、ここで権力というものを正当化してます。13節からがそうです。

「すべての、人の作った制度を尊重しろ」

というわけです。それから、15節から読みますと、

「15 **善を行いて愚かなる人の無知の言を止むるは、神の御意なればなり。16 なんじら自由なる者のごとくすとも、その自由をもて悪の覆(おおい)となさず、神の僕のごとくせよ。**

つまり、自由というのは勝手気ままな自由ではない。それを大事に使いなさいということを言っている。

なんじら凡(すべ)ての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏(おそ)れ、王を尊べ。

「王を尊べ」と言っているでしょ。今、王の制度をつくっているところは、イギリスと日本と、他にどこかありますかね、王室をもっているところは。私はやはり、あの王の制度というのは何だろうかなとつくずく思う。

日本だと皇室というのが一種の王の制度ですよね。ああいうのは、人間というレベルで考えたら一体何だろうなと、私も実に不思議に思う。それでいながら、何か日本でもし皇室がなくなったら、単に大統領制になったら、日本の精神世界は目茶苦茶になると思う。何かあそこがひとつのシンボルみたいなかたちで、正に国民統合の象徴で、権力も何もない。実際的な支配権は何もない。しかしながら、精神的な拠り所となっているんですね、どうも皇室というのは。我々だったら、キリストが拠り所ですけれども。日本人にとっては――キリストがまだいないでしょ――何かひとつの精神的な拠り所となっている。

あの、日の丸の旗を振ってワーワーやっているところを見てごらんなさい。あれだけの人が集まってくる。あれは不思議ですよね。それだけ愛されているということ。何で愛されるか。権力がないからなんです。実利と結びついてないから、と私は思っている。あれはあれでやはり尊重するべき制度なんだろうなと。なにも永久不変ではないけれども、それぞれの民族にとってのひとつの心の拠り所かなと思ったりしているんです。まぁそれは余談ですけれども。ここにも、「王に従え」なんてちゃんとそれを一応肯定してますからね。

●善をもて悪に勝て

18僕たる者よ、大なる畏をもて主人に服え、啻に善きもの、寛容なる者にのみならず、情なき者にも服え」（ペテロ前2・15～18）

これは、会社勤めやお役所勤めの方にこれを差し上げたいですね。目茶苦茶な上司がおるだろうけれども、聖書は

「我慢しなさい」

と書いてある。では、我慢したらどうなるか。神さまが助けてくれる。キリストさまがそれを補ってくれる。つまり、

「善をもて悪に勝て」

というのがいちばんキリストの精神です。パウロも言ってます、「善をもて悪に勝て」と。

パウロがそれを言っているのは、ローマ書12章のところです。このローマ書12章というのは素晴らしいですよ。ローマ書は大体、８章まで一番基本的なことをいいまして、それから９章から11章はユダヤ人問題を扱う。パウロはやはりユダヤ出身ですから、自分たちの民族であるユダヤ人が本当にキリストに逆らったけれども、キリストに帰ってきてほしいということをこんこんと説いて、そして12章はまた社会生活上の心得を言っている。

そこで途切れなくしゃべっているところをちょっと読んでみましょう。12章８節から、

「8**或は勧をなす者は勧をなし、施す者はおしみなく施し、治むる者は心を尽**

くして治め、憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし。9愛には虚偽あらざれ、悪はにくみ、善はしたしみ、10兄弟の愛をもて互に愛しみ、礼儀をもて相譲り、11勤めて怠らず、心を熱くし、主につかえ、12望みて喜び、患難にたえ、祈を恒にし、13聖徒の欠乏を賑し、旅人を懇ろに待せ、

一気にこうきているでしょ、こうやって畳みかけるように。これは全部、本当ですよね。

14汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛うな。

これはキリストのこころです。

15喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。

これもいいですね。

「ああ、合格しました」

「そうか、うれしいね」

と、一緒に喜んでやる。

「落っこちました。悲しいです」

「うん、一緒に泣こうね」

と。そうやって、喜ぶ者とともに喜び、泣く者とともに泣く。まぁワンチームですな、今のラグビーのああいうことですよ。

16相互に心を同じうし、高ぶりたる思をなさず、反って卑きに付け。

身分社会でしたからね。

なんじら己を聰しとすな。17悪をもて悪に報いず、凡ての人のまえに善からんことを図り、18汝らの為し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。

これは大事ですね。世の中にはあまりにも正義感の強い人は喧嘩ばっかりするんですよ。それは決していいことではありません。むしろ、ここにありますように、「つとめて和らぐ」こと。だといって、悪をそのまま是認するのではない。悪には悪を正すという知恵をいただかなければいけませんけれども、正義感ばっかりで世の中を突っ走ったら、これはもうどうにもならんですよ。そのあたりは、社会生活のうえで非常に大事なことです。

「為し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ」

と。「そんな喧嘩ばっかりするんじゃないよ」ということ。

19愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ。

正義感の強い人は、自分でそれを貫こうとして、非常にトラブルを起こすことが多い。しかし、そうではなくて、やはり忍耐して、これも神さまの御手にゆだねようと、そうやってそこはじっと我慢することが非常に大事です、この世の中は。ただ正義感だけで突っ走ったら、トラブルが起こるばっかりで全然よくないということを、身近なところで私は味わってきたんです。

録して『主いい給う、復讐するは我にあり、我これに報いん』とあり。20『も

し汝の仇(あだ)飢えなば之に食わせ、

「敵に塩を贈る」という、ああいうこころですね。

渇かば之に飲ませよ、なんじ斯(かく)するは熱き火を彼の頭(こうべ)に積むなり』21悪に勝たることなく、善をもて悪に勝て。」（ロマ12・8～21）

キリストは正に、善をもて悪に勝たれた方ですからね。

そういうことで、非常にこのローマ書12章は大事なところだと思っています。パウロは、

「善をもて悪に勝て」

と言う。悪に対して悪をもって仕返しをする、これは誰にでもできる。しかし、あなた方はそうであってはいけない。「善をもって悪に勝て」と言いました。その気持ちが、こういう奴隷と主人という関係でも、

「無茶苦茶な主人であっても、それに対して畏れの心をもって仕えなさい」

という、そういう忍耐の気持ちとなって表れているんだと思います。

●キリストの足跡に従う

「18僕たる者よ、大なる畏(おそれ)をもて主人に服(したが)え、啻(ただ)に善きもの、寛容なる者にのみならず、情なき者にも服え、

と。企業とか役所とかいろんな、そういう職階制度のあるところでは、無茶苦茶なやつがいっぱいおるはずなんです。そういうところでは、本当の知恵がないとね。ある時は抵抗しないといけないでしょうし、ある時は言うことを聞かないといけないでしょうしね。そういう知恵というものは必要だと思う。そういう忍耐すると、腹がたつと思うんです。でも、

「お前は腹がたつやろう。でもな、それは神さまの御意なんだ。神さまはお前をきっと喜んでくださるよ」

という、そういう慰めの言葉がその人にくれば、我慢できると思う。それが次のところに書かれている。

19人もし受くべからざる苦難(くるしみ)を受け、

しかしそれは、神さまはきっとそれを認め喜んでくださっている、わかってくださっているという、

神を認むるに因りて憂(うれい)に堪(た)うる事をせば、これ誉(ほ)むべきなり。

と書いてある。神さまぬきで、ただの人間社会で不当な仕打ちを受けて、それを「はい、わかりました」と我慢する、これは大変ですよ、本当に「そういうことに耐えろ」といったら。精神的に行き詰まる、鬱(うつ)になると思います。けれどもここに、

19人もし受くべからざる苦難を受け、

しかも、「神さま、そこで御意をなしてください」という、神さまを一枚そこへ引っ張りこんで、それで我慢するなら、

神を認むるに因りて憂に堪うる事をせば、これ誉むべきなり。

と。そして、

20**もし罪を犯して撻たるるとき、之を忍ぶとも何の功かある。**

罪に対して審きを受ける、これは当たり前ではないか。鞭打たれたってしょうがないじゃないかと。しかし、

されど若し善を行いてなお苦しめらるる時これを忍ばば、これ神の誉めたもう所なり。

世の中には暴君みたいなやつがいっぱいおるでしょ。上役とかね。また、昔の家庭では、暴君の夫に奥さんが一生懸命耐えているということがよくありましたよね。そういうことも連想されますが。

21**汝らは之がために召されたり、**

そこまで言われた。

キリストも

あるいは、小池先生はこれを「キリストこそ」と読めと言われた。キリストこそ、

汝らの為に苦難をうけ、

そうですよ、キリストの苦しみはご自分のためではない。我々が受くべき苦しみを全部、身代わりに受けてくださった。

汝らを其の足跡に随わしめんとて模範を遺し給えるなり。

あなた方のために苦しみを受け、あなた方をその足跡に従わせようとおもって、模範をのこしてくださった。モデルだと。

「キリストをモデルにして、キリストのみ足の跡をしたって歩んでいったら、どんな苦しみだって耐えていけるよ」

という励ましです。しかも、そのお方のことは、

22**彼は罪を犯さず、その口に虚偽なく、**23**また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、**

我慢に我慢を重ねられて、

正しく審きたもう者に己を委ね、

結局は、御手にゆだねます。「この身をゆだねます」ということで、神さまに全部ゆだねきっておられた。

●我と共にパラダイス！

そして、

24**木の上に懸りて、**

これは十字架ですね、木の十字架。

みずから我らの罪を己が身に負い給えり。」（ペテロ前2・18～24）

本当なんです。さっき、「十字架・聖霊」と言いました。

「小池先生の福音は、十字架とそれから聖霊だ」

と言った。十字架というのを我々が本当にどこまで真剣にわがこととして受けとっているか。これは非常に大事なことです。誰ひとりとして、神の審判の前に立てる者は誰もいないはずです。義なる神、聖なる神、その前に生まの自分がそのまま、「私は立てます」というのは、私はダメです。でも、

「お前はいいんだよ。私が身代わりになって、お前の受くべき審きを私が全部引き受けたから」

と。それがキリストの十字架なんですね。

しかも、それを象徴的に表しているのが、あの十字架の左と右にいた二人の強盗です。一人はキリストのことを散々なじって、

「お前は神の子なら、ここから下りてみろ。お前は人を救っておきながら、自分自身を救うことすらできないのか」

と、ボロクソに言ったでしょ。もう片一方の盗賊は、

「私は散々悪いことをしてきました。だから、こうなるのは当たり前のことです。けれども、最後の最後の、いのちがなくなるその瞬間に、あなたのようなお方のそばに居れたということが有り難いです。あなたが御国にお入りになる時には、こんなやつがいたということを覚えてください」

と言ったら、キリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

と言われた。小池先生は、

「あの言葉が一番好きだ。それを私の墓に書いてほしい」

と言われた。

「汝、今日、我と共にパラダイスにあるべし」

と。あれが小池先生の気持ちでした。よくわかりますね。

自分は、生まの自分のすがたではとても神の前には立てない。

「義人なし、一人だになし」

という、その自覚がなかったら、福音のところへ来れないです。

「私もあまり善くないかわからんけど、私より悪いやつもいっぱいおるんや」

とか、人と比べて、

「私はまだましな方や」

とか、そうやって相対的に人と比べて、「私はまだましな方や」と言っているあいだは、キリストは縁がないですわ。

「私はどんなことしたって、神さま、あなたの前に立てません。いやいや、もう毎日が苦しい。寝てるあいだだけが幸せです。目がさめれば苦しいんです」

という、それが若い頃の私の気持ちだった。そこからキリストは贖い出してくださった。本当にどん底のところにキリストの救いの手が差し伸べられて、そのドロ沼から引き上げられたという思いがありますから、このキリストのご恩は忘れられない。誰が何といおうが本当に。よくね、人は、

「本当にキリストを信じたら、みんな家族が幸せで、誰も病気にならなくて」

と、そういう御利益（ごりやく）を思うかもしれない。そんなことはありませんよ。私は二人の孫を天国に送りましたし、妻も血液の癌でした。それで80歳を前にして向こうへいきましたしね。だから、そんな、

「キリストを信じたら、家内円満、無病息災、すべてが天国」

なんてことはありえないんです。そんなことは、私は求めていません。

「何とかして、キリストの御意（みこころ）を私が受けとって、その御意を貫くような、そういう生き方をさせてください」

という。自分ではないです。キリストの「主の祈り」でも、

「父よ、御名（みな）があがめられますように」

と、まずキリストはご自分のことよりも、神さまのことを祈られた。

「御名をあがめさせてください。御意の天に成る如く、地にも行わせてください、この私を通して。私の負い目ある者をゆるしますから、私の負い目もゆるしてください」（マタイ6・12）

と、そういって、まず神さまのことを祈っておられますね、第一に。

だから、人間はまず自分なんですよ。

「神さま、まず私を幸せにしてください」

と（笑）。どこまでもエゴイストなんです。それが罪なんです。そういうことをいうと、

「それ何がわるいんや」

と、ひらきなおる人がたくさんいますわ、我々の国民の中には。

「神さまなんて、人間を幸せにするのが役目やないのか。だから、いろんな神さまがおるやないか、世の中に」

と。安産ならどこそこの神さまへ行きなさい、結婚ならどこそこの神さまへ行きなさい、頭がよくなりたいなら天神さまのところへ行きなさいとか。日本の神さまはみなそれぞれ分業なさっている。

「いや、分業でなくて、総合病院はありませんか？」

なんて（笑）、冗談ですけれども。でも、そういう人間を幸せにするための神さまは、人間の延長でしかないんですよ。そうでしょ、菅原道真（すがわらみちざね）だってもともと人間だったんだから。

そんな神さまでなくて、天地創造の神さまを受けとって、

「わが父よ」

と呼んだのがイエスさまだった。だから、イエス以外は、そんな「父よ」なんて呼べませんよ。ところが、イエスという方は神さまのところから来た方ですから、「父よ」と呼ぶのはごくナチュラルなんです。我々が「父よ」なんて言ったら、アンナチュラルというか、そぐわない。我々は所詮、地から出て地に還（かえ）るエゴイストでしょ。およそ天上の者とは縁を結べない。ところが、やはり天上を憧れるんです、不思議なことに。

●霊魂不滅

私はつくずく思う。見える世界、現実世界、我々ここに住んでいる地球ですね、これは五官で触ったりできる。そういう世界と、もうひとつ別次元の見えない、しかし根源の世界がある。神・キリストの世界は根源界なんです。根源界から産み出されて、地上界ができあがった。そして、地上界の中に我々は生まれた。けれども、地上界に生まれながら、

「地上界だけで、お前は終わってはいかん。お前はそんなちゃちな存在ではない。お前は本来は根源界、霊界に生きるべきで、それがお前の運命だ。しかし、いきなり霊界というのはちょっとよくない。まずは地上界でいろんな苦しみ、楽しみ、喜びを全部あじわってこい。充分にそこで役割を果たして、それで時がきたら召してやる、その時は引き上げてやるから、その時に私のところへおいで」

と。そんなふうに、地上界と根源界という、この二元で考えると、本当によくわかりますよ、ものごとが。それでたとえば、

「人、新（あら）たに生まれずば、神の国を見ることあたわず、神の国に入ることあたわず」（ヨハネ3・3）

と、キリストは言われたでしょ。「人、新たに」というのは、我々がオギャーと生まれたのは、土の人間、土から生まれて土に還る地上人間として生まれたんです。地上人間で生まれながら、

「お前たちはそんな地上人間で終わるような、そんなチャチな存在ではない。お前の本当の在り方は、天上界に生きるのがお前の本当の在り方だ。けれども、ものには順序がある。いきなり天上界ではない。先ずは地上界で充分、修行を積んでこい。地上界でいろんな修行を積んで、時が満ちたら、天上界へ召してあげる。その時は、肉体は土に還るよ。けれども、還らないものが与えられている、それは霊魂だ」

と。その霊魂が地上界に居るあいだに、神さまの栄養分でしっかり養っていただいて、霊が成長した時に、肉体がポロッとほろび落ちた時に、霊魂がフワーッと広がって、それが天に昇っていく。そういうイメージなんです、私は。

霊魂不滅というでしょ。霊魂は、肉体が滅びても、霊魂は不滅なんです。ところが、霊魂がやはり行く場所があるわけです。それが光の国へ行くのか、暗闇に行くのか、これはその霊魂に相応しいところへ行くそうです。ナチュラルですね、相応しいところへ行く。

●最後の切り札

それはヨハネ伝の3章に書いてます。こうしてみたら、聖書にはみんな書いてあるんです。必要なことは全部書いてある。

3章16節、さっきのニコデモの話のつづきです。ニコデモは、

「人新たに生まれずば」

とキリストに言われて、ドギマギしたでしょ。

「お母さんから生まれて、もう一回、お母さんの中に入るんですか？」

なんて、トボけたことを言っているでしょ。それに対して、

「いやいや、人は上より生まれなければ、

つまり天より生まれなければ、

土から生まれたものは土である。霊から生まれた者は霊である。こんな初歩的なことをお前さんはわからんのかね」

とキリストは言われて、それから12節に、

「私は地上のことを言っていて、それでもなかなか、あなた方はピンとこないなら、天上のことを言っても、わかるはずがないだろう」

ということをまず言われた。なぜかというと、

「天より降(くだ)りし者、即ち私のほかには誰も天に昇った者はいないんだ」

と言われた。13節。キリストはまず天上から来られた方なんです。天界から、天の次元からキリストは降ってこられた。「天より降りし者、即ち人の子」というのは、ご自分のことを「人の子」という表現で言っておられるでしょ。誰も天に昇った者はいない。つまり、イエスという方は天から来られて、天と地の間を行き来しておられたみたいですね。そして次に言われたのが、

「モーセが荒野で蛇を挙(あ)げた。私もまた挙げられる」

と。これは大変なことですよ。「モーセが蛇を挙げた」とはどういうことかというと、民数記略（21・8～9）に出てきますが、みんな罪を、姦淫を犯して、病気がはびこってバタバタ死んでいった。その時にモーセが祈って、青銅の蛇を造って木に架けて高く掲げて、

「あの蛇を仰ぎみたら癒(いや)される」

と言った。

「そんなバカなことがあるものか」

と信じなかった者はみな死んでいった。ところが、

「その蛇を仰ぎ見た者は全部癒された」

と書いてある。いったい「蛇」は何かというと、「呪い」なんです。呪いの象徴が蛇なんです。その蛇を仰ぎ見た者は癒されたということは、イエスは呪いの象徴となって天に挙げられたということ。それをここでは言っている。

「モーセが荒野で蛇を挙げた。そしてその蛇を仰ぎ見た者はみんな癒された。そのように私も必ず呪いとなって天に挙げられる」

つまり、十字架にかけられて、さらし者にされるということを、十字架をここで言っておられる。それはなぜかというと、

「そのお方を信ずる者が永遠の生命を得るためである」

と。「永遠の生命」は天上の生命でしょ。この地だけで終わる、そういう儚い生命ではない。天の次元に生きる、神のレベルに生きる生命をいただくためだと。ちゃんとここで言われている。十字架はここには言葉では出てこないけれども、ちゃんと十字架が出てきているんです。そして、

「16それ神はその独子（ひとりご）を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。17神その子を世に遣（つか）わしたまえるは、世を審（さば）かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。

そうでしょ。このお方を信じないで、生命の世界に入れるはずがない。もう最後の切り札として神さまが遣わしてくださったこのイエス、これを拒んでいたら、闇の中に行くしかないじゃないですか。

19その審判（さばき）は是なり。光、世にきたりしに、人その行為（おこない）の悪（あ）しきによりて、光より暗黒（くらき）を愛したり。

光がやってきたのに、人は自分の行いが悪いから、光よりも闇の方が好きだった。

20すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。

光に照らされたらやばいから、暗黒の中だったら照らされないから安泰なんです。ちゃんと書いてある。ところが、

21真（まこと）をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり」（ヨハネ3・16～21）

ちゃんとここにもう、本当に真理をここで語ってくれているでしょ。

●「ゼロ＝無限大」

「31上より来るものは凡ての物の上にあり、

これはキリストのことでしょ。

地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。

私は「天上と地上」と言ってます。我々は地から生まれて地にかえる。だから、我々がせいぜい知恵者が語たって、どうせこの世のことしか語れない。天上の世界を語ることのできるのは、天上の世界から来た方、そこに居た方しか語れないんです。それがちゃとここに書いてあるでしょ。

天より来（きた）るものは凡ての物の上にあり。32彼その見しところ聞きしところを証したもうに、誰もその証（あかし）を受けず。33その証を受くる者は、印して神を真（まこと）なりとす。

そのお方は、見たこと聞いたことを証言なさっても、誰もそれを受けいれない。わからない。ところが、それを「はい、受けいれます」と言った者は、神を真としているんだと。しかも、キリストがそうです。

34神の遣（つかわ）し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。（ヨハネ3・31～34）

キリストのことでしょ。キリストは聖霊に満たされて、そして父が与え給う言葉を語った。父が命じられた御業を行われた。

「私は自分から何も言えない。自分から何もできない。全部、父が私の中で『せよ』と仰ることをしている。『語れ』と仰ることを語っている。自分はゼロだ」

とキリストは言われた。それを小池先生は「無者」と言われた。自分はゼロだと。ゼロなるキリストの中に無限無量なる神さまが宿った。だから、

「ゼロ＝無限大」（0＝∞）

という数式を表されたでしょ。全部ここに書いてある。

そしてしかも大事なことは、皆一人ひとりがキリストを受けとれば、同じ次元に入れるということです。十字架で旧い我々は片づけられた。そこへ聖霊が来てくださる。

十字架で死ぬでしょ、

「われ主と共に十字架せられたり」

と。死んでしまいます。では、死にっぱなしか。とんでもない。復活されたキリストと同じ生命をキリストは与えてくださる。パウロはそれを言ってませんよ、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

うん、そこまではわかります。でも、あとはどうなるのか。

「キリストわがうちにありて生き給うなり」

と、ポーンと跳んでいるんです。

「キリストわがうちに来たり給う」

と、その「わがうちに」の「われ」とは何ですか。「わがうちに来たり給う」、キリストが来たりたもう「われ」はどこから来るんですか。

「新しい生命（新しいわれ）をくださるんです」
と、それを補ってくださいね。そうでしょ、論理的には。
「われ主と共に十字架せらて、死にました。もはや我生くるにあらず」
はい、私は死にましたから。では、あとはどうなるのか。
「新しい生命をキリストはくださいました。復活の生命、キリストの復活の同じ生命をくださいました」
と。その新しくいただいた生命に聖霊が来て宿りたもう。
「**われ主と共に十字架されてもはや我生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生きたもう**」（ガラテヤ２・20）
ということは、
「与えてくださった新しい生命なる私の中に、聖霊のキリストさまが宿ってくださって、そして私をその聖霊さまが導いてくださっている」
と。こういうふうに言えば丁寧なんですけれども、パウロさんはちょっとそこがカットされているわけです。私はやはり法律学者ですから、一つ一つ物事を順次立てて話をいたします。パウロさんもきっと、
「そうだ、そうだ。あんたの言うとおりだ。私はちょっとカットしたよな」
と言っておられるかもしれませんよ。

●旧い我と新しい我

本当に大事なことは、そうやって、
「われ主と共に十字架せられて、旧（ふる）い私は死にました。エゴイストの私は死にました。自己中心の私は死にました。もはや旧い私は生きていません」
と。十字架で死んだんだから。では、あなたは死にっぱなしか。とんでもない。復活されたキリストが同じ生命をあなたにくださいました。あなたは新しい生命をいただきました。その新しい生命を生かしてくださるお方は聖霊さまです。しかも、新しくいただいた生命は何によって生きるのですか。神の言葉によって生きるんです。
「**人が生きるのはパンだけでない。神の口から出る一つ一つの言（ことば）で生きる**」
と、キリストは言われたでしょ。あれはそれを言っている。旧い肉なる人間は、神の霊なる言を受けつけないですよ。肉なる人間は肉なるものしか食べられない。霊なる人は、生まれて初めて霊なる言が食物として入ってくるんです。
そこを皆さんわからないから、肉なるままの姿で御言を一生懸命に食べよう、御言を実践しようとおもうから無理があるんです。それをやっているような顔をするから、偽善者がうまれる。
牧師なんて危ないですよ。模範とならないといかんでしょ。そこが徹底して本当に十字

架で自分がもう片づけられていることを受けとらない中途半端な受けとり方をしている牧師だったら、自分を人の前でモデルにして立派に見せなければいかんから、いっぱいそこに無理があるんです。そんなのをちょこちょこ私も見ましたよ。それは無理している。いや、牧師というのはつらいですよね、モデルにならんといかんから。

皆さん、牧師でなくてよかったですね（笑）。小池先生はどうだったかな。

「人間小池を見るな」

といって、先に先手を打っておられたものね。それで私は言うのに、

「どれが人間小池で、どれが御霊の小池かわかりません。色をつけてください。はい、ここは御霊の小池で、ここは人間小池と」

そんな区別はなさらないから、先生は。

「私は躓きの石だからね」

なんて開き直っていられるでしょ。

でもまぁ、最後までよく小池先生についてこられた方は立派ですよ、そうやって先生を信じてついて来られたのは立派だと思います。まぁ余計なことを言いましたけれども。

●肉なる人と霊なる人

私が言いたいことは、皆さん一人ひとりがここで新しくつくられた者なんです。神の遣わしたもうた方、そういうふうにあなた方は変化しているということ、これをしっかり受けとってほしいんですよ。主の証人（あかしびと）というのはそれ以外にありません。旧い人間がいくら主の証人になろうとしたって無理です。旧い人間が霊の食物を食べようとしたって、食べられない。霊の食物は霊の人にして初めて食べられる。だから、

「人新たに生まれずば神の国を見ることあたわず」

とキリストは言われたでしょ。それと同じことがここで言われている。

我々は何よりも先ず、「地から生まれて地にかえる」という肉なるもので生まれてきたんだけれども、その肉なるもので生まれてきたものが、次に霊なるものをいただいて、霊なる人にチェンジしないといけない。変貌しないといけない。その変貌さしてくださったのがキリストなんです。キリストの十字架なんですよ。キリストの十字架は、私の肉なる、地から出て地に帰る、そういうエゴイスティックな私たちを全部、十字架でもう片づけてしまった。それが、

「われ主と共に十字架につけられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と、死んだんです。旧い私は神さまの眼からみたら、もう死んでいるんです。そしたら、死につぱなしですか。そうじゃない。

「あの復活の生命、新しい生命をお前に与えたよ」

とキリストは言っておられる。無条件にいただいているんです。つまり、

「私はまだこんな罪が、あんな罪がありますから、私は不信仰ですから」
と。そんなことを言わさないんです、十字架は。これを私は強調したい。
「でも、私はまだ罪が深くて」
なんていうのは、これは十字架を蹴飛ばしているんです。そうでしょ。
「十字架でお前を片づけた」
とキリストは仰るのに、
「いや、私には十字架は効き目がありません。私はまだ罪びとです」
なんていうのは、キリストを蹴飛ばしているんですよ。こんなキリストに対して申し訳ないことはない。ところが、往々にして信仰深いという人はそういうことを言うんです、
「私はまだまだです」
とか。それは違うんです。
「**われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず**」
と、それを徹底しなさい。旧き我はとても神さまの御国になんか入れてもらえるはずがない。けれども、それを「入れてあげたい」というのが御意なんです。それは、
「**我々の中に住まわせた霊を妬むほどに、神は慕って愛してくださった**」
と。しかも、霊というのは体がなかったら困るみたいなんです。霊だけがフラフラしているのは困るんですよ。人間は、さっきも言いましたように、卵が受精しますね、いつ霊が入るのだろうか。これはわからないんです。それでまた、霊は肉体がまた土に帰っても、霊は生き残っているものね。それで霊は夢遊病者のようにフラフラとしていたら困るから、やはりちゃんと霊を慰めてやって、行くべきところに行かしてやらないといかん。
「ひと」というのは「霊が止まる」と書いて「霊止」でしょ。神の霊が止まっているのが人だという。単なる肉体だけではない。人間存在というのは不思議なんです。一体、霊というのはどこにあるか。脳の中か。脳ではない。脳は心臓まではコントロールします。けれども、どうも人間存在と霊というものはちょっと別ものみたいです。しかし、人間存在を離れて、霊はいない。だから、不思議ですよ、こうやって霊の学問を展開していったら、皆さん、霊学博士になっているかも（笑）。本当にわからないですね、霊はいつ宿るのだろうか。
肉体が亡びても、霊だけは独立していますから、それがフラフラしていると困るというので、
「成仏しなさい」
といって、よく昔、お坊さんがフィリッピンとかああいう戦地へ行って、お坊さんが祈っておられた。それはやはり戦地で亡びた兵隊さん、それから民間人、そういう人たちの霊がさまよっているらしい。それを本当に霊界の行くべきところへ行くようにと、お坊さんが祈られたんです。ああいうのは私は本当だと思いますよ。

●天の次元と地の次元

我々にとっては、我々の霊が行くところは、ちゃんとキリストが示してくださっているから、霊はちゃんとキリストのところへ行かないといけません。それがここに書いてます。

「34**神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。**
35**父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。**36**御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神の怒その上に止るなり**」（ヨハネ3・34～36）

と。だから、さっきの

「**神を信ずる者は審かれない**」

とあるでしょ。私たちは、霊魂は、肉体がたとえ土に帰ろうと、霊魂はそれとは別個の存在として、しかもちゃんとキリストが、

「**我は道なり、真理なり、生命なり**」

と言ってくださった。

「この道を歩め。そしたら必ず、神さまの次元へ到達するよ」

と。これは皆さん、本当にしっかり受けとってほしい。

イエスという方は――ここ（天）は神さま、神の次元でしょ――イエスという方はここから降ってきてくださった。天の次元から地の次元へおりてきてくださった。だからちゃんと、

「**天に昇った者しか天のことはわからない**」

と言っておられるでしょ。地に来てくださって、我々の地の次元に宿って、ここで天の次元のことを語ってくださった。

ところが、地の次元の人間にはこれはわからない。外国語みたいなものですよ。日本人には外国人のことはわからないみたいに、天国人ではない地の人間は、天のことをキリストが語られても、全然ピンとこない。それが福音書で、問答が全部ズレてますよね。それは全部そこから来ている。だから、地の次元の我々人間が天の次元のことをわかるためには、我々はチェンジしないといけない。我々は天人にならないと、天の人に、質的に天上人になれば、天の次元がみんなわかってくる。それをニコデモとの対話で言われたわけです。ニコデモは、

「**人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず**」

と言われて、

「**歳をとってから、そんな再び生まれるなんて無理ですよ、お母さんのお腹にもういっぺん入るんですか**」

と。それに対してイエスは、

「**水と霊によって生まれずば**」

と、これは要するに、

「上から、別の生まれ方をしないといかん。肉により生まれるものは肉なり、霊によりて生まれるものは霊なり」

ということ。

ここで「肉と霊」ということを言っているでしょ。聖書の中で「肉」という言葉、「霊」という言葉がどういう使われ方をしているかということを旧約聖書と新約聖書で、皆さん、調べあげてほしい。これは五月の福音セミナーでそれを取り上げたいし、夏の特別集会もそれを焦点として考えてみたいと思っている。「霊」という言葉と「肉」という言葉。いろんな使われ方をする。肉体を指す「肉」のこともあります。

それから小池先生は、パウロのローマ書なんかで「霊と肉」というとき、

「霊というのは神中心の在り方を霊という。肉というのは自己中心の在り方を肉という」

そういうふうに言っておられます。そういう使い方もあります。肉というのは、自己中心の心の在り方、生き方。霊というのは、神中心の在り方。これは「義」というものに繋がります。こっちの自己中心は「罪」というものにつながります。そういった「霊と肉」。それから、肉体と霊魂という意味で、肉と霊ということも言われることもあります。

それからたとえば、ヨハネ伝6章63節のところ。ここは大事なところですよ。弟子たちですら、躓いたんです。6章でずっと、

「私を食べろ、私を飲め。モーセが与えたパンを食べた者はみな死んだ。しかし、私が与えるパンは死なない。私は生命のパンである」（ヨハネ6・32～36）

とか、さんざんそういうことを言われた。それを受けとれなかったでしょ。弟子ですら、

「こんなバカバカしい言葉は聞いていられるか」

といって離れて行ったと書いてある。それに対して、

「生かすものは霊なり、肉は益するところなし」

ここでまた「霊と肉」ということが出てきました。

「わが汝らに語りし言は霊なり、生命なり」

と。こう言っておられるでしょ。この「霊と肉」という使い方。同じ「霊と肉」という言葉を、パウロが使うとき、それからこうやってヨハネ伝で使われているニュアンスがちょっとずつ違う。だから、聖書の中から「霊と肉」という言葉を拾いだして、この場合はどんな使い方をしているのだろうか、この場合はどうなんだろうかと、それを一度整理なさるといいと思います。

●人間の霊は父のもとへ帰る

キリストは徹底的に霊の次元の方で、我々は地の次元の人間です。しかも、イエスという方は、天の次元、霊の次元から地の次元にくだってこられた。しかし、ここで語ってお

られるのは、天の次元のことを語られる。だから、人々は受けいれない。それをニコデモにその対話で仰っている。

「たとえ地のことを語ってさえ、あなた方はなかなか受けいれない。ましてや天の次元のことを語ったら、あなた方はどうしてわかるだろうか」

と。そういうことをニコデモとの対話では仰っています。とにかく、イエスという方は、天の次元のお方だったのに、地の次元にくだって、我々と同じ生活をなさった。ここで喜怒哀楽を味わってくださって、涙を流し、そうやってくださった。しかしながら、目的は何かというと、天の次元の神の心を我々の中に植え付けることでしょ。我々が天の次元の人間に変わることでしょ。つまり、地の次元の人間は、いつまでたっても地の次元から脱出できないわけです。身体は土に帰ります。でも、霊魂もやはり地の次元に留まったら困るわけです。なぜかというと、

「神は人の中に住まわせ給いし霊を妬むほどに愛し給う」

と。神さまから見たら、この霊魂はこっち（天）へ来てほしいわけですよ。

「肉体は土に帰って結構だ、けれども、霊はこっちへ来てほしい」

と。ところが、その霊は行きたくても行けない。それで苦しんでいるわけでしょ。まぁたとえていえば、そういうことだと思う。ところが、

「そこへ行かしてあげるよ」

と言ってくれたのがイエスなんです、「行かしてあげるよ」と。それをキリストご自身が言っておられます。

「我は道なり、真理（まこと）なり、生命（いのち）なり。

と。何の道か。

我によらでは誰にても父の御許（みもと）に到るものなし」（ヨハネ14・6）

と言われた。イエスが仰ったのは正に、

「自分こそは、あなた方、地の次元にいる人間を神さまの喜び給う天の次元へ連れて行く、それが私の役目だ。そのために降ってきたのだ」

ということをキリストは言われた。そうでしょ。それに対して、どなたも異論はありませんね。キリストはそういう役目をもって――天のところで機嫌よく暮らしておられたんですよ、ところが――こんなところに来て、みんながキリストをなぶりものにして、弟子ですら最後は逃げてしまったでしょ。そうでしょ、あのゲッセマネで、

「頼む、祈っていてくれ」

と言われても、みな寝ておったでしょ。そんなのが人間なんですよ。ペテロなんて、

「私は命をかけてもあなたについて行きます」

と言っておきながら、イエスが捕まったあとで、

「知らん、知らん、イエスなんか知らん」

と女中さんに言ったら、鶏が三度鳴いたとか（マタイ26・69～74）。全部、あれは本当の話が書かれています。

●「ボヤッと生きているんじゃねぇよ！」

我々は、このままだったら地から出て地に帰る。「ああ悲しい、悲しい」と、それで終わりなんですね。ところが、そこに神さまは、

「身体（からだ）が土に帰るのはしょうがないけれども、せめて霊だけはこっちへ帰ってほしい」

と、きっと願われたのに、これも行けないわけです。地上でフラフラ、無縁仏だとか、成仏できない霊がさまよっていて、小さな子どもに憑（つ）いたりして、病気になったりする。ご浄霊というようなことをやって、霊から解き放ってやると、スッと成長するとか。ああいうのは全部、霊界の姿としては本当だと思う。だから、小池先生は言われた、

「小さい子をお墓になんか連れて行ったらいかん。さまよっている霊がくっつくから」

と。大人にはくっつかない。振り払われるから。子どもにはくっつくという。まぁそれも真理ではないかなと思う。

人間に見えない――我々は見える世界に生きていますから――そんな霊だ何だと言われてもわからないけれども、キリストはそこから来ておられるから、みんなわかるわけです。サタン、悪魔もキリストを見たら、

「あんたは神の子ですね」

と叫んでいる。やはり、霊の次元で生きているやつは、悪霊であろうと何であろうとみな、わかるわけですよ。潔（きよ）い霊か、汚（けが）れた霊か、これはおれの仲間か、これは違うとかね。ところが、人間というのはボヤッと生きてますから――「ボヤッと生きているんじゃねぇよ！」なんて（笑）――霊なる人なのに、人間は忘れて、うっかりしてしまって、肉体がすべてだと思って生きているのが現代人でしょ。ところが、

「神さまは、あなた方の中に住まわせた霊を妬むほどに愛し給う」

という。つまり、

「変な霊にとっつかれて持って行かれたら困る。この霊は私（神）のところへ帰るべきだ。肉体が地上で役割を終えたら、そのあいだに霊は成長して、こっちへ帰ってきなさい」

と。やはり、霊の成長というのは、肉体と一緒に成長する。我々が小さいときから百何歳まで生きるあいだに、いろんな苦労して、いろんな体験をして、人を愛して、何をしてとやっているあいだに、霊魂もきっと成長していくんです。成長した霊魂が、肉体がほろびて土に帰る時に、

「ご苦労さん、よく私と一緒に暮らしてくれたな、おおきに」

といって、それで霊はスーッと上へ引き上げられていく。引き上げられていく霊魂は幸せですけれども、誰もが行くかというと、汚れた霊魂は行けないですよ。清らかなところへ行けるのは、清らかな霊でないと行けない。ところが、エゴイスティックな霊は、真っ黒ですから行けない。では、どうしたらいいのか。十字架が潔めてくれている。十字架の血潮が清めてくれている。

「ありがとうございます。潔められない、清めることのできない自分を、イエスさまの十字架は全部清めてくださいました。ありがとうございます」

と。十字架が本当に、これはもう本当に力なんです。

それをパウロが言いました、

「十字架の言は、亡びる者には愚かだけれども、救いにあずかる我らには神の力なり」

と。コリント前書1章18節、

「18それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救わるる我らには神の能力なり。19録して、『われ智者の智慧をほろぼし、慧き者のさときを空しうせん』とあればなり。20智者いずこにか在る、学者いずこにか在る、この世の論者いずこにか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給えるにあらずや。21世は己の智慧をもて神を知らず（これ神の智慧に適えるなり）この故に神は宣教の愚をもて、信ずる者を救うを善しとし給えり。22ユダヤ人は徴を請い、ギリシヤ人は智慧を求む。23されど我らは十字架に釘けられ給いしキリストを宣伝う。これはユダヤ人に躓物となり、異邦人に愚となれど、24召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の能力また神の智慧たるキリストなり。25神の愚は人よりも智く、神の弱は人よりも強ければなり。

26兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おおからず、能力ある者おおからず、貴きもの多からず。27されど神は智き者を辱しめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、28有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。29これ神の前に人の誇る事なからん為なり。30汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて我らの智慧と義と聖と救贖とになり給えり。

キリストが我々の知恵であり、義であり、聖であり、贖いでありたもう。

31これ『誇る者は主に頼りて誇るべし』と録されたる如くならん為なり、と有るが如し。」（コリント前1・18～31）

パウロはアテネからコリントへ行った。アテネでアテネの知恵者と議論をして、パウロは痛い目にあった。それでもうパウロはすっかり自信をなくして――ある意味では精神的

に行き詰まって――コリントへたどりついた。そういうことをここで言っている。

「1兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の証を伝うるに言と智慧との優れたるを用いざりき。

弁舌でとか、自分の知恵でとか、そうではなかった。

2イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。

つまり、十字架一点張りだと。もう十字架とキリストしか知らんと。

3我なんじらと偕に居りし時に、弱くかつ懼れ、甚く戦けり。4わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。

5これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。

6されど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廃らんとする司たちの智慧にあらず、7我らは奥義を解きて神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして、神われらの光栄のために、世の創の先より預じめ定め給いしものなり。

天地創造の前から我々のために定めてくださったものだと。

8この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば栄光の主を十字架に釘けざりしならん。9録して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』と有るが如し。

「ギョギョ～ッ！」とびっくりするようなことを神さまは我々のために用意してくださった。天地創造の初めから。こういう神さまのご計画、経綸、これにふれて、本当に感動する。それでなければダメだというんです。

10されど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。11それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、斯くのごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。

「人間も自分の霊しか自分のことは知らないよ」と言っている。私は、自分の霊が何を思っているのか全然わからない。でも、パウロは言っている。

11それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、斯くのごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。12我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり、

聖霊を受けている。

是われらに神の賜いしものを知らんためなり。13又われら之を語るに人の智慧の教うる言を用いず、御霊の教うる言を用う、即ち霊の事に霊の言を当つ

るなり。

これはえらいことですよ、霊のことは霊の言でしか表現できない。肉の言葉でしゃべったって、そこは表現したってそれはズレている、ということを言う。

14 性来のままなる人は神の御霊のことを受けず、

生まれつきのままの人は御霊のことは受けない。水と油。これは大事ですよ。いくら我々が福音を語っても、全然入っていかない人は、肉の人だから、霊のことはわからないんです。その人自身がチェンジしてくれないと。体質が変わらないとダメなんですね。それがここに書いてある。

彼には愚(おろか)なる者と見ゆればなり。

我々もかつてはそうだったのかもしれない。

また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁(わきま)うべき者なるが故なり。

15 されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるる事なし。」（コリント前2・1～15）

そして自分は人からわきまえられることはないと、ちゃんと書いてある。だから、我々は普通の世間の人から、

「あいつは変なやつだ、変人だ。あいつはアホやないか。我々の信じないことを一生懸命信じて、それを真だとやっている。あいつはアホや」

と。そのとおりです、ちゃんと聖書に書いてあります。本当にそう思いますよ。だから、このパウロがこういったところに書いてあるのは、本当に真理をうがっています。真理そのものを書いてくれている。

●「ギョギョ～ッ！」と驚く

私が申したかったのは、地上の人に神は霊を与えてくださったけれども、この霊は、いろいろ神の言を語られても、これを受けつけないんですよ。この霊が神の言を受けつけるには、この霊が天の霊をいただかないと。生まれながらの人間の霊は、天上のものを受けつけないんです、霊魂がありましても。ところが、この霊が新しくチェンジしますと、質が変わりますと、向こうのものがスーッと入ってくる。でも、自分で自分の霊をチェンジさすことはできないでしょ。それをさしてくれたのが十字架なんです。それは十字架なんですよ。だから、十字架が大事だというのはそこなんです。

人ができないことを全部、キリストはなさった。キリストはもう祈っていれば、眩(まばゆ)い姿になって、天国へスーッと行ってしまう方です。キリストは、

「神さまはこうだよ」

と言っておられる。人は、

「自分の感覚はそれと違います」

と。感覚がそう言うのは勝手ですよ。でも、そんな感覚が何を言おうと、そんなものは蹴飛ばしておいて、

「私は神の言にゆだねます」

という。これが信仰ということです。信仰というのはただ信じこむのではない。御言が、

「お前はこうだ」

と言ってくださるのに対して、

「はい、ありがとうございます」

と。これが信仰ということになる。御言(みことば)ぬきの信仰なんて、勝手な思い込みです。そうじゃなくて、御言が、

「こうだよ」

と言ってくださると、

「はい、ありがとうございます」

と受けとる。ただそれだけのことです。私はすべて、根拠は聖書です。自分で作り出したものではない。小池先生だってそうですよ。小池先生は聖書のことを、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

と言われた。「ギョギョ～ッ！」とびっくりして読む。それをちゃんと、

「神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり」（コリント前2・9）

という。それを本当にしたら、「ギョギョ～ッ！」ですね。そうでしょ。だから、「ギョギョ～ッ！」と驚かない人はまだ本当の世界を知らない。たとえば、

「いったい雷なんて何だろうか？」

と言っている人に、ドカ～ンと落ちたら、

「ウワ～ッ！　びっくりした！」

と、あじあわなければいかん（笑）。そういうことでしょ。私の話は具体的でしょ。雷とは何かと議論しているところに、雷がドカ～ンと落ちてごらんよ、「ウワ～ッ！　雷だ！」とわかる。しかも昔は、「カミナリ」を、神が鳴っている、神が怒っているといった。

要するに、我々は、地上の人間の知りうることは限られている。

「井の中の蛙(かわず)、大海を知らず」

という諺(ことわざ)がありますね。思われたる小さな世界のことしか知らん。でも、宇宙を創(つく)られた神さまでしょ。万物を造られた神さまでしょ。そのお方の意を受けて顕れたのがイエスという方でしょ。しかもイエスという方は、もとは天界におられた。ヨハネ伝の初めに、

「太初(はじめ)に言(ことば)あり、言は神と偕(とも)にあり、言は神なりき」（ヨハネ1・1）

とある。そういった、本当に神さまの次元に機嫌よく暮らしておられた方が、

「お前、地上へ行ってくれ」

と、神さまから託されて――イエスは派遣社員だと私は言っている――

「お前、行け。行くところは大変な、きたない所で、エゴイストがいっぱいおって、愛なんていう言葉は蹴飛ばすやつばっかりおる。行くか？　どうだ？」

「はい、行きます」

と。

●荒野の試み

あの荒野の試みがあるでしょ。あれもそうですよ。四十日四十夜断食して、背中とお腹がペッタンコにくっつきますよ、それは四十日四十夜断食したら。その時にサタンが、

「お前は神の子だろ。この石ころをパンに変えてみろ」

と。向こうの石ころは玄米パンみたいな感じなんです。その時にイエスは、

「人が生きるのは、パンのみによるにあらず。神の口から出る一つ一つの言で生きる」（マタイ４・４）

という、その言で撃退された。あれだけでも凄いですよ。

それから次は、イエスを高い所へ連れて行って、

「飛び下りてみろ。

と。「天使がパッと支える」と詩篇にちゃんと書いてあるんです。

お前、高い所から飛び下りて、天使が出てきて支えたら、みんなはお前を神の子だといって、拍手喝采で従うぜ」

「神を試みるべからず」（マタイ４・７）

と言われた。足を滑らせた時に支えていただく。これは見守りなんです。でも、神が支えてくれるかどうかテストしてやろうと思って、崖から落ちたら、これは全くダメです。

「わが足滑りぬと言いしとき、主よ、汝われを支え給えり」

と詩篇に書いてある。

「あっ、足を滑らせた。失敗した！」

と思った時に、サッと守っていただける。そういう護りがあるということと、

「では、飛び下りてやろうじゃないか。神が支えるかどうか見てやろうか」

と、これは全然ダメです。

それから、サタンはイエスを高いところへ連れて行って、世の栄華を見せて、

「俺と取引したら、お前にこれを全部やるよ」

「ただ、神のみを拝せよ」（マタイ４・10）

と。つまり、この世の富とか権力とか、そういう栄耀栄華と取引するのではないよと。政治家というのは、やはりそういうものと手を結びたがるわね、トランプでも何でも。また、民は民でそういうものを求める。でも、神の国は違います。神さまの国はこの地上のもの

とは全く別の次元のものだから。

●チェンジしなさい

それを携えて来られたのがこのイエスというお方で、しかも、そのお方は地の次元で苦しんでいる者たちを天の次元へ連れて行きたい。いいところへ連れて行ってやりたい。でも、そこは汚れた者は行けない。エゴイストは入れない。土なる人間はそのままでは入れない。では、どうしたらいいのか。

「生まれ変わりなさい、チェンジしなさい」

「どうやったら、チェンジするんですか。旧い私は、どうしたらいいんですか、自殺するんですか？」

「ちがう。私は、お前のそういう旧い罪、エゴイスト、その面は、もう十字架で全部片づけた。神さまの眼からみたら、お前はもう片づいているんだ」

と。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

とパウロは言った。

「生まの自分は、こんな自分で生きていても、そんなものは放っておきなさい。本当のあなたは、もう十字架で旧いあなたは片づけられている」

と。では、死にっぱなしですか。とんでもない。

「われもはや生くるにあらず」

でしょ。生きていないでしょ。では、どうなったんですか。

「復活されたキリストの生命をキリストご自身がお前の中に下さった。その新しいいただいた生命を導いてくださるのは聖霊だし、聖霊は新しいあなたの中へ入っていく。その新しいあなたの中へ入っていくときに、御言も入っていく」

と。新しく生まれ変わった者でないと、神の言は入ってこない。肉なる人間が霊なる神の言を受けようとしたって、これは消化不良でダメです。そこに気がつくのが大事です。

ところが、明治の頃から日本の知識人の中に聖書が入ってくるが、みんな――トルストイもそうだったと聞いてますけれども――自分の肉なる自分のままで、霊なる神の言を実践しようとした。そして行き詰まった。私が好きだった亀井勝一郎なんていう人も結局、それで躓いて親鸞の方へ行った。だから、亀井勝一郎が小池先生に出会っていたら、変わっていたと思う。小池先生は、

「神さまはイエスを通して、できない言をどんどんぶつけてくる。降参すれば、それでいいんだよ」

と言われる。それを、自分が降参しないで、肉のまま、エゴイストの人間のままで、霊な

る神の言を実践しようとするから無理がある。やったつもりでも、

「俺はやったぜ」

といって、やってないやつを審く、そういう偽善者になる。先生は、

「十字架で砕かれている。自分自身は、旧き我はもうそこで死んでいる。それに気がつく。気がつけばいいんだ」

と。それがパウロが言う、

「われ主と共に十字架せられたり」

ということ。十字架せられたら、生きている人は誰もいない。

「もはやわれ生くるにあらず」

では、どうなったのか。

「新しい生命をくださった。新しい生命を導いてくださるのは聖霊さまだ。新しい生命は潔いよ」

と。潔い生命ですから、そこへ聖霊という聖（きよ）い霊が宿れるんです。旧い我々はエゴイストですから、エゴイストの霊のところへ聖い霊は宿れないから、そこで矛盾があります。ところが、旧い我はもう十字架で、

「われ主と共に十字架せられたり」

と、死んでいるんです。死んだんですよ。

「ああうれしい、葬式を誰かやってくれた？」

というようなもんですわ。

大体、「洗礼を受ける」というのはそういうことなんですよ、本当は。本当の洗礼というのは、白い衣をつけて、ザブンと水につけて、川の流れの中へ全身を水に浸す。あれは、

「旧い私は死にました」

ということ。そして、水から上がってくるでしょ。

「新しい生命に復活しました」

というシンボルなんです。ところが、頭の上に水をチョロチョロ流したって、それはシンボルとして意味を持っているかしらんけれども、どこまでそれが受けとれるか私はよくわかりません。

洗礼というのが指し示しているのは何かというと、水の中へ全部、全身を浸すことによって、旧い私はもう死んだというお葬式なんです。水から上がってくるのは、復活を表している。新しい生命をいただきましたと。新しい生命は聖霊さまが導いてくださいます。

「もはやわれ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という、あのパウロのガラテヤ書2章20節を、あの洗礼という儀式が本来表しているべきなんです。でも別に形の上で洗礼なんかやる必要はありませんよ。

●キリストのプレゼント

本来、天の次元のものを、地の次元の私たちにキリストはプレゼントした。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。

「私を通っていけば、みんな天に行けるよ」

と仰ったのに、誰も通って行かない。行こうとしても、

「私みたいに汚れた者はいけません」

といって。そこでどうしても、十字架です。本来なら、こんなものなくて、スーッといけば、いちばんよかったんですよ。人間が、

「ああ、よかった、よかった」

といってスーッとみんな天へ行ければよかった。ところが、己が罪とか、エゴとか、そういう向こうに相応(ふさわ)しくない姿のままでは向こうへ行けないでしょ。せっかくお招きくださるのに、

「申し訳ない。私は行けないんです」

「そうか、なぜ行けないのか」

「はい、私はこんなで……」

「ああわかった、わかった。それを全部私が引き受けたよ」

と。十字架で全部、引き受けてくださった。だから、どうしたって、この十字架というものがある。しかも、十字架の凄さというのは、過去・現在・未来、全部なんですよ。過去の諸民族、それから将来の諸民族、世界、そのすべてをこの十字架は全部荷なっているんです。だから、

「神さまがなさった最大の奇蹟は十字架の贖いの事実だ」

と、私は思っています。それは天地を創造されるのも凄いよ、神さまは。天地創造という御業は凄いけれども、その天地創造に勝る凄わざは十字架です。しかも、それを誰かがなさらないといけない。それをイエスという方がご自分を十字架に捧げられた。だから、イエスという方はなんと凄い方か。

そのことを言っているのがピリピ書です。２章４節から、

「4**おのおの己が事のみを顧(かえり)みず、人の事をも顧みよ。**

あなた方は、自分のことばっかり言わんで、人のことも考えなさいよと言って、

5**汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。**

「キリスト・イエスの心を心とせよ」とはどういうことなんでしょうか。

6**即ち彼は神の貌(かたち)にて居給いしが、**

そのお方は、神の似姿、神さまそっくさんだったけれども、

神と等しくある事を固く保たんとは思わず、7反って己を空しうし、僕(しもべ)の貌(すがた)

をとりて人の如くなれり。
奴隷の姿となって、人の姿となって現れてくださった。
8既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。」（ピリピ２・４～８）
つまり、十字架はキリストにとって何の必然性もない。それだけは強調したい。キリストという方は山上で祈っておられたら、眩くなって、モーセとエリヤが現れてきたでしょ。何を話しているかというと、
「どうやって贖いのわざをなさるか」
ということを話し合っていたと書いてます。そのように、イエスという方は祈っておられれば、眩くなって、スーッと向こうへ行く方なんです。だから、水の上を歩いてくるのは当たり前なんですよ。肉体を宿としておられるけれども、祈っておれば、霊化してしまう方なんです。霊化してしまうと、水の上を歩けるんですよ。そういう不思議なことがいろいろ起こっていますよね。それはあの方は、自分でやっていない。
「神さまが『やれ』と言われることをそのままやっているだけだ、私はロボットだ。自分の意志なんて持たない。神の意志が私の意志だ。神の言が私の言だ」
と。全部、自分はゼロ。それを小池先生はイエスのことを「無者」と言われた。
「ゼロ＝無限大」（０＝∞）
と言われた。そういうお方が、ではもう、スーッと天に行ってしまうか。そうではない。十字架を負われたでしょ。キリストが祈って、スーッと天国へ行ったら、我々は取り残されて孤児で、みんな地獄行きですわ。それをあのお方は、祈れば眩くなってスーッと行くべきお方が、私たちと同じ姿になって、私たちの負うべき罪を全部ひっかぶって――過去・現在・未来の全人類の罪なんてどんなに凄いか、そんなものは想像できないですよ――それを背負われたんです。そして、
「わがこと終わりぬ。父よ、わが霊を御手にゆだねます」（マルコ23・46）
と仰った。そこで終わったんです。

●キリストの十字架の御業の凄さ

だから、イエス・キリストの十字架の御業の凄さ。これをイエスに託された神さまの御思い。神の御意とキリストの思いが一つになった。そのイエスがゲッセマネで祈って苦しんで、そのあと十字架上で、
「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたもうか」
と言われた。矛盾しているようですけれども、それは全部、イエスをそれだけ苦しめているのは、我々の全人類の、過去・現在・未来の罪が、キリストを追い詰めて、苦しめたんですよ。それをキリストはくぐりぬけた。だから、その方が十字架の贖いのあとで、栄光

の姿で顕れてくるのはもうナチュラルなんです。死にっぱなしであるはずがない。それを本当に受けとってください。そして、その栄光の姿を、

「お前たちみんなにやるよ。お前たちは同じ姿になるんだよ」

と言われた。それはそうでしょ、親は子どもを、自分が素晴らしかったら、同じように素晴らしいものにしてあげたいと思うでしょ。キリストが実践され、実現なさった、あの栄光の復活のお姿、そこに我々一人ひとりを全部抱き上げて、天に昇ろうという。それが、

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我によらでは父の御許にいたることなし」（ヨハネ14・6）

と、ちゃんとあらかじめ言っておられる。しかも、我々はすぐには行けない。邪魔しているものがある。それを十字架で片づけてくれた。何といたれりつくせり、イエスという方はやってくださったか。それを思ったら、もう何があろうと、そんなことはどうでもいいんですよ。自分の身体がどうなろうと、そんなことはどうでもいい。病気であろうが何であろうが、どうでもいい。このイエス・キリストと本当に一つであるということ。それをしっかり受けとったら、もういつどうなってもハレルヤです。人間はビクビクしすぎていますよ、今、本当に。

でも、私が今日言ったことを本当に皆さん、受けとってください。私も、明日にもこの世を去るかもしれませんでしょ。皆さんもそうですよ。

「いつまでもあると思うな、親と金」

と私の近くのお寺に書いてあった。そういうふうに、我々は本当に明日をもしれぬ身なんです。それはヤコブ書を読んでごらん。ちゃんと書いてあるから。ヤコブ書は素晴らしい書ですから読んでくださいね。そういう我々でありますけれども、我々はいつ何があろうと、もう大丈夫、アーメン・ハレルヤです。

「もはやわれ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という、パウロが言っているあの境地。それを皆さん一人ひとりが、

「あれは本当ですよ、聖書の言っていることはみな本当ですよ」

と。ペテロもヤコブもヨハネもパウロもみな一緒なんです。それを私たちは、二千年後に受けついで、こんな東洋の一角で――しかも、なにも私は専門の牧師でも何でもない、単なる法律の学者にすぎませんでした――そういう人間がこうやって、皆さんの前で語っている。本当はもっともっとたくさんの人の前で語りたいけれども。それは、これは本ものだからです。本ものほど強いものはないんです。

皆さんは、どうぞ本ものになってください。私は、

「誰が何と言おうとも、このイエス・キリストにおいて現されたこの世界は本ものです。私は本ものをいただきました。だから、どうなったっていい。それは長く生きて、できるだけ人さまのためにお役にも立ちたいと思っているけれども。で

ももう、私は全部ゆだねきってます」

という思いです。この世界は本ものを生きる世界ですから、あまりこの世的な常識に縛られないでください。しかし、無限に常識を破るわけにはいかない。そういうところを、どうぞ、お願いいたします。

●祈り

主イエス・キリストさま。世間では、コロナウィルスが何だと、大変な騒ぎとなっていますが、それらを突破して、ここにお一人おひとりをあなたが力の御手をもって招きよせ、あなたの生命の御言を語らしてくださったことを感謝いたします。

「人を生かすものは霊であって、肉は役立たず。私が語った言は霊であり、生命である」（ヨハネ6・63）

と、あなたはヨハネ伝6章63節でお語りになっています。

「人の生きるのはパンのみにあらず、神の口から出る一つ一つの御言による」（マタイ4・4）

と仰いました。肉で生まれた私たちが、あなたの十字架を受けとって、霊なる人として新しく生まれ変わり、霊なる人は霊なる御言、あなたの霊言をいただいて成長していきます。そして、時がきたときには、この肉体を脱ぎすてて、霊体を賜ってあなたの御許に召されていきます。そして、この地上にあるしばしの間、どうぞ、あなたのこのご愛を、福音を、まだあなたを知らない方々にいかにもして宣(の)べ伝え、争いあるところに平和をもたらすように、愛の実現していくような世の中にしていくように、我々一人ひとりを神の僕として、神の子として、御(おん)用い下さるように希(こいねが)い奉ります。

何よりも私たちは、日毎の食物としてあなたの御言をこの霊なる人がくらって、成長していきとうございます。

「人を生かすものは霊であって、肉は役立たず」

と仰ったように、どうぞ、この世の人ひとりひとりが本当にあなたの霊の生命に目覚め、霊の生命をいただいて、新しく生まれ変わり、神の国を成就していくように、働かせて下さるように、お願いいたします。

この新宿集会が果たすべき役割を立派に果たしていくことができますように、御用い下さいますように、お願いいたします。

この感謝と讃美と祈りを皆さまの祈りとともに、主イエス・キリストさまの尊き御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。